編集・発行
児玉源太郎顕彰会
〒745－0874
山口県周南市公園区5854－41
周南文化協会 内
TEL. 0834-22-8190
印刷　㈲ 精文社
山口県周南市若宮町1－55
TEL. 0834-21-1611

児玉源太郎顕彰会 設立8年 着実に成果を

ふるさとの偉人、児玉源太郎の功績を伝え、広めていきたいと平成28年（２０１６）６月に児玉源太郎顕彰会を設立して早や８年。次世代への継承を念頭に、構想を描きながら1年1年の目標を立てて実践してきました。

顕彰会の活動が道を切り拓いてきたことに大きな喜びを感じます。この８年の足跡を振り返り、２年後の10年を展望します。

【平成28年（２０１６）】

設立総会を6月9日に周南市文化会館で開催。源太郎没後１１０年にあたります。会長は小川亮・元徳山市長。会報『藤園』創刊号（以降、年1回発行）を10月1日発行、本格的な活動を始めるための設立記念式典を周南市の遠石会館で開催。『藤園』は源太郎の雅号から付けました

【平成29年（２０１７）】

ニュースレター『本丁通信』創刊号を3月25日に発行。（以降、年2回発行）。題名は源太郎の生家があった地名「本丁」から。命日7月24日を雅号にちなんで「藤園忌」と定めて児玉神社で命日祭、児玉家の菩提寺・興元寺で墓前供養を、周南文化協会の協力で記念の茶会と俳句募集を始めました。

【平成30年（２０１８）】

顕彰会が中心となって「明治維新百五十年回想と顕彰」周南実行委員会（小川亮会長）を発足、4月22日に祐綏神社で奉祝祭、9月23日に山口県周防部の史跡探訪バス、12月19日に明治の酒と食を再現した「明治維新百五十年の宴」を遠石会館で開催。

【平成31年・令和元年（２０１９）】

1月16日に小川会長逝去。5月に元号が令和に。5月25日に赤尾嘉文副会長（山口放送相談役）逝去。同日の総会で山下武右理事（山下内科医院院長）が二代目会長に選出。2月15日から3日間「児玉源太郎の足跡をたどる台湾の旅」を実施しました。

【令和2年（２０２０）】

源太郎の生涯を描いたＤＶＤ『児玉源太郎・未来を築く』（全3巻）完成。周南市の小・中学校、高校、大学、図書館、市民センター、国会図書館、47都道府県の中央図書館などに寄贈。

製作したＤＶＤ「児玉源太郎・未来を築く」

【令和3年（２０２１）】

令和4年の児玉神社遷座百年を控えて7月24日に奉賛会（山下武右会長）を発足。社殿や境内の修復整備工事の資金集めなど顕彰会も支援しました。

児玉神社遷座百年奉祝祭

【令和4年（２０２２）】

3月10日の児玉神社例祭で起工、7月24日の「藤園忌」命日祭で竣工。児玉本家（東京）をお招きして10月23日に遷座百年奉祝祭を挙行。

【令和5年（２０２３）】

顕彰会の拠点作りへ向けて検討会議を重ね、社務所と一体化させた構想を6年度に具体化させます。10周年の節目にあたる7年度に顕彰会事務局を移転する予定です。

公開シンポジウム

「アジアの中の日本」

政治学者の姜尚中さん基調講演
社会学者の福屋利信さん講演と
哲学者の小川仁志さんによるディベイトも

児玉源太郎顕彰会事務局長　西﨑博史

政治学者で東京大学名誉教授の姜尚中さんを招いての公開シンポジウム「アジアの中の日本　歴史は未来につないでこそ、意味を増す！」が2月24日に周南市立徳山駅前図書館でありました。

三部構成で、第一部〈基調講演〉が姜尚中さんの「アジアと日本」から「アジアの中の日本」へ、第二部〈講演〉が社会学者で周南公立大学客員教授の福屋利信さんの「伊藤博文は日韓併合に反対であった」、第三部〈ディベイト〉が哲学者で山口大学教授の小川仁志さんのコーディネートによる「若者たちと考える東アジアの未来」。

基調講演される姜尚中さん

聴講者であふれる会場

主催したのはシンポジウム「アジアの中の日本」実行委員会。企画した福屋利信さんは「現在の日本では、東アジアの近現代史や政治を語ることは、なんとなく避ける傾向が強いようです。とくに若者の政治への無関心は、国政及び地方選挙への投票率の低さにつながり、日本の未来を危うくしています。このシンポジウムはアジアの歴史と政治に新たな歴史認識や視点を問いかけ、それを若者とのディベイトによって未来につなげたいと考えています」と意図を語ります。

午後3時から6時過ぎまで3時間余り、視野の広いお話と学生ら若者を交えての熱心な討論は意義深いものでした。私の補足的な解釈を加えてご紹介します。

「アジアの中の日本」へ　多文化共生主義を提唱

基調講演で姜尚中さんは、地政学のお話から入り、ナショナリズム、ポピュリズムに触れてグローバル化の中でナショナリズムをどう考えるか。ナショナリズムとは何か。石川啄木がふるさと岩手を思うこと。敗戦で戦地からの帰還兵が日本の山を見て涙すること。清水幾多郎の『歴史とは何か』における愛国心とは何か。ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』における国民・民族（ネーション）は想像された共同体であり、学校、軍隊、工場など運命共同体として一つになること。以上を学術的に定義づけられました。

また、過去と未来は現在でつながります。未来は分からないが、過去を踏まえて、現在頑張れば次世代の未来に繋がると提唱。人間は自分のアイデンティティーからなかなか抜け出せません。宗教やイデオロギーは人間を狂わせる場合があります。中近東の紛争、イスラエルとガザ地区の問題はイスラム教とユダヤ教の対立というより国民国家で説明したほうがよい、と主張。

昭和が終わるまでの日本は、「アジアと日本」のように「と」で二つを繋ぎ、日本はアジアで突出した存在であるという意識を表現していました。しかし、平成、令和の時代では「アジアの中の日本」という共生意識が台頭していると指摘。加えて、多くの国民はアメリカ型の消費社会をめざしていました。国民経済が一つのユニットとしてのアジア型社会より欧米型社会を指向していました。

例えば1957年『中央公論』に発表された梅沢忠夫の論考『文明の生態史観』ではいかに欧米に近くてアジアに遠いかが述べられています。さらに冷戦終結後の世界情勢は、自由主義対共産主義の対立でなく諸文明の対立としてサミュエル・P・ハンティントン（アメリカの政治学者）の『文明の衝突』を紹介。この30年間で世界は大きく変わりました。GDPで日本は中国に抜かれ、ドイツにも抜かれました。この事実を認識することが現在の日本には大切とも苦言を呈しました。

昨年刊行された『アジア人物史』全12巻（集英社）は姜尚中さんが総監修しました。東アジア、東南アジア、南アジア、中央アジア、西アジアまで有名無名の人々の評伝を積み重ねて描いた画期的な書物との評価を得ています。今の世界のパワーバランスは150年前のアーリーモダンの時代に戻りつつあります。とくに出生率は日本が1.2、韓国が0.9と危機的な状況にあります。現状を維持するためには世界で2.1が必要。150年前と違うのは人口減。来年は終戦から80年。韓国から見れば開放されて80年。ほとんどの社会が相似形になってきました。今や日韓で争っている場合でなく、協調を指向すべき時代にきています。

伊藤博文はどんな人物か 日韓併合に最後まで反対を

福屋利信さんは昨年5月に釜山外国語大学で、日本の半島統治は、日韓併合に最後まで反対した伊藤博文の保護政策と伊藤以後の植民地政策との「二層構造」で捉えるべきとするオルタナティブな歴史認識を特別講義。その講義を踏まえて講演しました。

一昨年5月に『海峡から聞こえてきたブルースー関釜連絡船と関釜フェリーが帯びた記号論』（大学教育出版）を刊行した福屋さんは、釜山と下関は大阪と下関の半分ほどの距離で本来は近しい関係。日本の初代内閣総理大臣伊藤博文は帝国主義の元凶のように言われるが新しい国際人と主張し、伊藤公とはどんな人物だったのか。過去を冷静に紐解いてみたいとしました。

講演される福屋利信さん

伊藤博文は1863年（文久3）、幕末の開国か攘夷かで揺れる中、長州藩がロンドン大学に派遣した若者5人、つまり長州ファイブの一人。翌年にイギリス、フランス、アメリカ、オランダの四国艦隊下関砲撃事件が起きて長州は敗北、休戦交渉に入りました。この過程で長州は欧米との歴然とした力の差を感じ、尊王攘夷の限界、海外と経済交流の必要性など多くのことを学びました。イギリスの外交官アーネスト・サトウは長州の柔軟性に感じ入り、長州を尊敬する一面も持つようになりました。このサトウの尽力で下関に日本初の英国領事館開設が成り、長州は犬猿の仲であった薩摩とも手を組むという西欧的プラグマティズムを駆使して倒幕の推進力となり、明治維新に繋げました。

1894年（明治27）日清戦争に勝利した日本は翌年春帆楼で下関条約を結んで講和成立。日本の全権は伊藤博文と陸奥宗光、清国全権は李鴻章。この条約で朝鮮の清国からの独立が認められ、2年後には大韓帝国（南北朝鮮を領土とした）が成立。その後も大日本帝国の富国強兵策は進められ、「北は樺太より南は台湾に至る一連の列島を領有して、支那大陸を半月型に包囲し、さらに朝鮮と満州に足場を持つにあらざれば、帝国の安全を保障し、東亜の時局を制御することはできぬ」とする基本理念のもと、1904年（明治37）日露戦争開戦に至り、翌年アメリカ大統領ルーズベルトの斡旋によって日本全権小村寿太郎とロシア全権ウィッテとポーツマス講和条約を結びました。この7日後に帝国主義戦略を強化する関釜連絡船が就航、その後の暗い歴史が始まりました。

朝鮮統監府設置に伴い、伊藤が初代統監になります。64歳の時です。彼はその頃「大韓帝国を合併する必要なし」と言っています。半面、当時の大韓帝国は小中華思想を持っていてこれには高圧的に接しました。

1909年（明治42）ハルビン駅頭で韓国人革命家・安重根によ

って日韓併合の最後の壁であった伊藤が暗殺されると、その翌年韓国を併合し、半島全体を植民地とし、朝鮮総督府を置きました。安重根は韓国では国民的英雄ですが、果たしてそうでしょうか。伊藤は融合して半島を治めようとしていました。梅子夫人とともに韓服を着て写真を撮っています。朝鮮民族と文化を愛していました。その後朝鮮総督に就いた寺内正毅が長州の陸軍出身者として半島を統治したのとは大いに異なります。伊藤は融和政策、寺内は武断政治、この二層構造で日本の半島統治は捉えられるべきです。この歴史認識が、ぎくしゃくした日韓関係に、いくばくかの関係修正の糸口を与えることを期待します。

このあと、新しい台湾人意識とは、台湾人の87％が日台関係の現状維持を求めていること、アメリカが台湾の独立を一方的に支持していないことを北京にはっきりと伝えていること、などを示唆。日本は「台湾有事は日本有事」ではなく「台湾無事は日本無事」を提唱すべきと、台湾にも詳しい福屋さんなりの見解を示して第三部に入りました。

ディベイト「若者たちと考える東アジアの未来」

哲学者で山口大学教授の小川仁志さんがファシリテーターを担当。小川さんは地域に根差した「哲学カフェ」を開催、また若手社会人、大学生が一緒に暮らしながら「地域課題」に取り組む「アカデミーハウス」のシニアリーダーも務めています。

パネリストは台湾文化を研究中の前田空美さん（山口県立大学国際文化学部国際文化学科2年）、山口市議会議員の安河内淳朗さん（山口大学在学中に中国での交換留学生体験）、在日韓国人で楽天銀行勤務の沈（シム）ウービンさん（梅光学院大学卒）、自衛隊幹部候補生に内定の坂元開さん（山口大学総合科学部4年）、台湾からの交換留学生の王凱禾（ワン・カイヘイ）さん（山口大学総合科学部）の5人。

「台湾には中国に近い考えと距離を置く考えの2つの意見がある。しかし対立しているのではない。台湾はすでに独立しているとの認識を大半がもっている。中国の脅威があるから若者の政治意識が高い。山口の若者はもっと政治に関心をもってほしい」

小川仁志さんのコーディネートによるディベイト

「国防や政治に関心があって防衛省で研修も受けた。外国から攻撃を受けた時、第一波のみしか対応できない現実に衝撃を受けた。若者の政治参加で日本の将来を真剣に考えなければならない。自衛隊は災害派遣でも貢献していてそのことも大きな関心事」

「政治への当事者意識が低い。高める必要があるが、これから自然に高まっていくのではないかとみている。情報過多の時代に正しい情報を得て読み取る力が求められる。外に出ること、外の世界を知ることで多様性を学んで自らの行動に生かしたい」

「若者の政治意識が低いことは分かっている。まわりの学生も多くがそのように思う。しかし、今ひとつ理解できずにいるのでこのような場と機会を作ってほしい」

「日本はもともと先進国だった。今は衰退途上先進国への道をたどっている。国民が変化を好まないから今日のようになったのではないか。日本には高い力があると思うのでもう一度戻って輝く姿を描いてほしい」

以上のような、それぞれの経験を踏まえて発言がありました。姜尚中さんからも東京一極集中の弊害、留学していたドイツでの体験から国でなく地域に適した州ごとの政治が機能している、日本の制度改革、社会構造変革を本気でしないといけないとの有益なお話がありました。最後に小川さんが「若い時に外の世界を見ることで幅広い視野が生まれ、自分の考えをはっきりと言えるようになる。地方から発信して精神的な成熟も促していければと思う。若者の力で社会を変えていきましょう」と締めくくりました。

新刊紹介

『山県有朋―明治国家と権力』

小林道彦 著

小林道彦著『山県有朋』

会報『藤園』執筆者としておなじみの小林道彦さん（北九州市立大学名誉教授）が、政治権力の消長とともに山県有朋の生涯を描いた一冊です。山県有朋については、権威主義的な藩閥政治家の印象が強かったですが、近年は地方自治論や外交政策にも着目されて優れた保守政治家としての再評価が進んでいます。本書は豊富な新出史料や研究成果を踏まえて孤独な権力者としての実像に迫りました。

山県は天保9年（1838）長州藩萩に下級武士の子として生まれ、大正11年（1922）小田原の古稀庵で没しています。昭和を代表する政治史学者の岡義武は山県を称して「明治日本の象徴」と。幕末から明治、大正とまさに近代日本とともに歩んだ人生でした。小林さんは、尊王思想に山県の原点を見ながら「奇兵隊という小さな武装集団から生まれた山県の政治権力はその後どのように生成・発展していったのか。それは、明治国家の運命とどのように関わっていたのか」と序に記します。日露戦争直前から山県の政治権力が揺らぎ始め、山県からの自立を図る桂太郎や児玉源太郎の姿も興味深いです。

2023年11月25日発行
中公新書　960円＋税

『アジアを生きる』

姜 尚中 著

姜尚中著『アジアを生きる』

政治学者で東京大学名誉教授の姜尚中さんが、歴史の悲しみを乗り越えて未来に託したメッセージ。私たちが生きるアジアの未来の姿を構想した一冊です。集英社創業95周年記念企画『アジア人物史』（全12巻）の総監修をしたのが執筆のきっかけ。「〈アジア的なるもの〉への実人生的な感慨として、未来へのメッセージとして、新しい世界と人間の見方に対する希望の表明である」と姜さん。

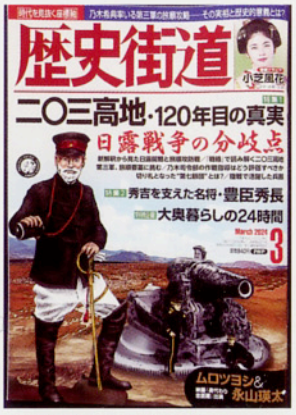
学生時代に大塚久雄の「社会科学の方法」をきっかけに20世紀最大の社会科学の巨人マックス・ウエーバーを知り、恩師藤原保信先生の勧めでドイツ留学へ。そこで民族、宗教、歴史を通して西洋とアジアの関係を客観的に俯瞰し、米国の社会学者イマニュエル・ウォーラースティンの「近代世界システム論」に影響を受けます。最後にたどり着いたのは出身地熊本の思想家、横井小楠（1809～69）の人種や民族にとらわれない「普遍」の理念。故郷の再発見にもつながりました。

現在、鎮西学院学院長、熊本県立劇場館長を務めるなど地域に根差した幅広い活動をしています。

2023年5月22日発行
集英社新書　900円＋税

月刊『歴史街道』3月号 二〇三高地・120年目の真実

時代を見抜く座標軸―月刊『歴史街道』令和6年3月号（株式会社PHP研究所発行）は特集「二〇三高地・120年目の真実　日露戦争の分岐点」を組みました。



『歴史街道』令和6年3月号

総論「新解釈から見た日露開戦と旅順攻防戦」で、筆者の小林道彦さん（北九州市立大学名誉教授）が「日清戦争に勝利した日本は、三国干渉を受け、満州や朝鮮半島の支配権をめぐってロシアと衝突した」との解釈に疑問が生じるとして開戦前の日本の情勢、旅順と二〇三高地の戦いがもつ意味についてその実相に迫ります。ロシアの南下に対して日本列島防衛への高まる危機感が開戦を決意させ、多くの日本人が死んだ満州は特別な地としての満州経営に踏み込んでいったとの見方を示します。

総論に続いて「戦略で読み解く―なぜ、二〇三高地が焦点となったのか」（現代史家・大木毅）、「死闘に次ぐ死闘：第三軍、旅順要塞に挑む」（作家・松田十刻）、「乃木司令官の作戦指導はどう評価すべきなのか」（戦史研究家・瀬戸利春）など興味深い論考があります。

2024年2月6日発行
840円

窓

児玉源太郎顕彰会にはいろんな声が届きます。この頁が内と外をつなぐ「窓」の役割を果たせれば、と思います。

吉原雍さん（理事）を偲んで

児玉源太郎顕彰会理事の吉原雍（たすく）さんが1月16日に入院先の徳山中央病院で逝去されました。享年81。心からご冥福をお祈りします。

周南市文化会館近くでギャラリー「三匹の猫」を経営、地元の画家や写真家、工芸作家の作品展を開いて地域の文化に貢献しました。児玉源太郎顕彰会では平成28年6月の設立以来、理事として活躍。会報「藤園」に源太郎の生涯をドラマ風に毎号連載、創刊号の子ども時代から8号（昨年5月）の壮年時代までその独特の味わいが好評でした。

令和元年5月23日には当時会長をしていた周南西ロータリークラブの協力で周南市児玉町の児玉神社境内に顕彰会の活動などを知らせる掲示板が設置されました。

シャンソンが好きで周南シャンソンを楽しむ会に所属、毎年のように素敵な歌声を聴かせてくれました。昨年7月30日に周南市学び・交流プラザでのコンサートが最後の舞台となりました。1月19日の葬儀ではその時の「ベサメムーチョ」などが流されて涙を誘いました。2月29日にはホテルサンルート徳山で「タスクちゃんを偲ぶ会」が催され、懐かしい日々を思い起こして語り合いました。

吉原雍さん。あなたはリベラリストでした。そして何より自由人として人生を謳歌されました。

ベサメムーチョを歌う吉原さん。
昨年7月30日のサマーシャンソンコンサートが最後の舞台に

臨済宗護国禅寺で児玉源太郎120回忌を

さいたま市在住の金子展也さんから1月14日、一通のメールが入りました。このような内容が綴られていました。

顕彰会では2026年の児玉源太郎没後120年に向けて各種催し物が企画されていると思います。そこで提案なのですが、2025年の120回忌を児玉源太郎が開基である臨済宗護国禅寺で行えないものかと考えています。昨年末に護国禅寺を訪問した際、住職に打診したところ否定的ではありませんでした。

金子さんは2018年5月に『台湾に渡った日本の神々』（光人社）を出版。台北市にある臨済宗護国禅寺についてもその故事を小冊子にまとめています。同寺は1998年「市指定古蹟」に指定。かつては臨済宗妙心寺派の台湾別院で、鎮南山臨在護国禅寺と呼ばれました。

顕彰会ではこの機会をとらえてコロナ禍で中断していた台湾の旅を来年秋に企画してみたいと思います。金子さんはこの5月の連休中に台湾取材旅行にまた出かけられる予定です。

鎮南山臨済護国禅寺

児玉神社境内に遷座百年記念碑を建立

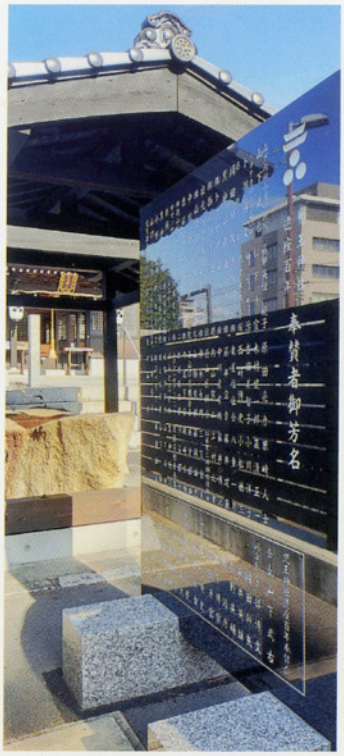
児玉神社遷座百年記念事業は令和4年10月23日の奉祝祭を中心として2年がかりで実施されました。社殿の改築や境内の整備も順調に進んで一新されました。

児玉源太郎顕彰会が支援した遷座百年奉賛会（山下武右会長）は昨年7月24日の「藤園忌」命日祭の日に解散総会をして大きな役割を果たしました。この一連の事業

を記憶に残すため、奉賛会最後の事業として児玉神社境内に記念碑が建立されました。

御影石の台座に黒御影石が置かれ、「児玉神社遷座百年祭」と中央に刻んで白字で書かれています。左下には「奉祝祭斎行　令和四年十月二十三日」。裏には奉賛者御芳名と奉賛会役職名が白字で刻まれています。奉賛会とその活動にご支援、ご協力いただいた皆様方のお気持ちが後世に伝えられます。

児玉神社



遷座百年記念碑の裏面

児玉神社境内に遷座百年記念碑を建立

台湾向け特急車両 4月27日に鉄道陸送公開へ

山口県下松市の日立製作所笠戸事業所で製造した台湾向けの特急車両を一般公開する「道路を走る鉄道車両！見学プロジェクト」（実行委員会主催）が4月27日に市内で開催されます。

下松市制85周年と市観光協会50周年の記念事業で「ものづくりのまち」をアピールします。

笠戸事業所は、台湾鉄路管理局から都市間特急「EMU3000」を計600両受注、2021年から順次納入し年内ですべての出荷を終える予定です。特急の営業運転は21年12月に始まっています。

当日は特急車両2両を載せた専用トレーラーが午前10時に笠戸事業所を出発、JR下松駅南口を折り返して事業所に戻る3.3キロのコース。約1時間の所要時間。沿道には飲食など「イベントエリア」も設けます。

日立製作所は1921年に笠戸工場を開設以来、新幹線をはじめとする鉄道車両を製造してきました。鉄道陸送イベントは2019年の英国向け高速鉄道車両に続いて3回目。前回は3万5千人で賑わいました。

令和6年度 会費納入のお願い

4月1日から令和6年度が始まります。早めに会費の納入をお願いします。

個人会員の会費は2千円ですが、個人としても1万円以上の賛助会員は大歓迎です。会員募集チラシと振込用紙（郵便局専用）を同封しました。銀行振込の場合はお名前と連絡先を事務局までお知らせください。

児玉源太郎顕彰会はいよいよ9年目に入ります。総会を6月8日（土）、「藤園忌俳句」を6月と7月で募集、「藤園忌茶会」を7月20日（土）、命日祭と墓前供養を7月24日（水）に開催する予定です。「藤園忌」行事は8回目を数えます。

トピックス

中央乃木會『洗心』刊行

東京・乃木坂の乃木神社にある中央乃木會（小堀桂一郎會長）が1月1日に『洗心』第198号を刊行しました。昭和41年1月の創刊で年2回発行。最新号は昨年9月13日の「御鎮座百年奉祝記念大祭」、翌日の「御鎮座百年奉祝祭」を報告。祭事のあった両日、境内では著名人による絵灯籠画の献灯、縁深い山口県と鹿児島県による物産展「乃木坂にぎわいマルシェ」、14日夜は全国各地から寄せられた日本酒が振る舞われて賑わったと伝えています。

乃木希典と児玉源太郎。幕末の長州に生まれ、軍人として明治の近代化に貢献。その象徴的な場が日露戦争でした。児玉源太郎顕彰会では設立以来、会報『藤園』とニュースレター『本丁通信』を届けて情報交換をしています。

中央乃木會刊行『洗心』

旧乃木邸のポストカード

乃木神社に隣接した旧乃木邸が昨年9月13日の記念大祭をはさんで12日から14日までの3日間、公開されました。見学者には令和5年度一般公開としてポストカードが無料で配られました。

旧乃木邸の外観（雪景色）と1階廊下、乃木大将と辻占売少年像、煉瓦造りの馬小屋の4枚入り。辻占売りの少年の話は、乃木希典が陸軍少将だった明治24年に金沢を訪れた折、8歳の今越清三郎少年と出会った物語。辻占売りで一家の生計を支える少年に感銘を受けた乃木少将は励ますために金弐円を手渡し、今越少年はこの恩を忘れることなく、努力を重ねて金箔業の世界で大きな実績を残しました。旧乃木邸は乃木希典の遺言によりその邸宅地が東京市（当時）に寄贈されました。

旧乃木邸ポストカード

編集室より

トルコとの不思議なご縁

川上　浩史

昨年、トルコ共和国は建国百年を迎えました。初代大統領ケマル・アタチュルクはオスマン帝国の軍人として頭角を現しました。

オスマン帝国はクリミア戦争などロシアと対立を続けており、日露戦争での日本の勝利に歓喜したといいます。日本と同じ頃に軍の近代化のためドイツの助力を求め、モルトケ参謀総長はゴルツ大尉の日本派遣に反対してメッケル少佐を送り、ゴルツ大尉をオスマン帝国に派遣したそうです。メッケル少佐は陸軍大学校教官として来日し、児玉源太郎と親交を深めました。

ケマルは第一次世界大戦においてガリポリの戦いで活躍し、大統領となって57歳で没しており、児玉源太郎と通じるものがありそうな気がします。日土関係を調べると面白いかもしれないと思っています。

（新南陽郷土史会事務局長）

「坂の上の雲ミュージアム」へ

松本久美子

先日、松山市にある「坂の上の雲ミュージアム」を訪れました。周南市美術博物館で収蔵している児玉源太郎の資料を貸し出した展覧会「明治日本のリアリズム　未来へ」を開催中だったからです。

このミュージアムは司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」をテーマに展示を行っている館です。安藤忠雄の設計した建物はユニークで、特に「空中階段」（中間部分の支柱を省いた構造の階段）はまさに「雲」にのぼっていくかのようなイメージでした。

明治の人びとの息吹を感じることができた展覧会でした。

（周南市美術博物館次長）

初神籤「大吉」

西﨑　博史

新年初めに引くおみくじが初御籤（はつみくじ）です。児玉神社で引きました。運勢は「大吉」。願望は「思うまゝです　しかし油断すれば叶わず」。なるほど、と納得。ご祭神のおっしゃる通りです。

一昨年の児玉神社遷座百年奉祝記念事業で社殿や境内が一新されて心洗われます。参拝者も増えました。参道の源太郎の生涯を描いた大きな横看板を隣の児玉公園で遊ぶ子どもらが眺める光景は微笑ましいです。自然に学べる環境はいいなと思います。

顕彰会の拠点作りがいよいよ動き始めます。社務所の建て替えとともに社務所の一角を顕彰会事務局とする案を計画中。令和6年度総会で概要をお示しする予定です。

（児玉源太郎顕彰会事務局長）